

本・読書

平和運動の軌跡たどる

岡谷市出身のジャーナリスト、岩垂弘さん(74)「埼玉真新座市」が「核なき世界へ」(同時代社刊)を出版した。朝日新聞社の記者として長く平和運動の取材にかかわり、現在は平和・協同ジャーナリスト基金代表運営委員として「核兵器廃絶」を訴え続けている。同書は、核問題、被爆問題、反核運動などについて雑誌や学会誌、機関紙などに執筆したものをから選び、一冊にまとめた。日本の反核運動は沈滞しているが、「再び世界をリードするような高揚期を迎えてほしい」との願いが込められている。

2009年4月、プラハにおけるオバマ米大統領の「核兵器なき世界」に向けた演説は世界に衝撃を与えた。核兵器が開発されてから64年。米ソの核軍拡競争を見てきた著者にとっては信じがたいほどの大変化が訪れた。「半世紀余に及ぶ日本の反核の訴えが、やっと国際政治のリーダーたちを動かすに至った。日本の反核運動にとっても、今こそ出番なのではないか」と著者は言う。

日本の反核運動は内部における政党の主導権争いから分裂を繰り返した結果、低迷した。このため優れた活動家が育た

岡谷市出身のジャーナリスト岩垂さん

「核なき世界へ」刊行

ず、また運動の歴史を知らない人も増えた。同書は、日本の運動が世界の中でどのような地位を占めてきたか、原水禁運動を追い続けた記者が見た平和運動の軌跡をたどる。その中で、米国の「核の傘」に守られながら反核を唱える矛盾、核の脅威に鈍感になった日本人、ヒバクシャは地球規模で生まれているにもかかわらず「唯一の被爆国」を叫ぶ日本など、反核運動の実態や乗り越えなくてはならない多くの課題を提示している。

併せて、護憲、改憲に関する新聞論調や政府の動きを分析。「九条を守る」から、九条の理念を世界に広げようという「九条を生かす」運動が広がりつつあるなど、護憲運動の現状と課題についての論考を掲載。また、忘れられようとしている沖縄の痛み、被爆の証人・第五福竜丸の保存問題などにも言及した。

岩垂さんは諏訪清陵高校から早稲田大学を卒業。朝日新聞社に入社し、社会部次長、編集委員などを務めた。「平和運動取材で訪れた広島、長崎での体験が自分の生き方を決めた」と書く。「多くの人たちが原爆の犠牲となった人々を悼み、核廃絶を目指す運動を続けている。そこにいまだ絶えることのないヒューマニズムの精神をみる」とし、日常生活で人間に絶望することが多い中で、「そのことを確認できると人間に希望をつなぐことができる」と言う。「市民大衆による粘り強い運動だけが事態を改善できる」と訴える。



岩垂弘

岩垂弘さんの著書
「核なき世界へ」

A5判215頁。1900円＋税。問い合わせは同時代社(電話03・33261・3314)へ。